

“黒い羊”と“白い羊” ——2つのタイプの“表現者”を範例として——

酒 井 俊 行

抄 録

真逆に位置する2つのタイプの表現者平手友梨奈と川上奈々美を分析することによって，“黒い羊”問題を議論してみた。この二人の表現者は立ち位置は真逆であるが，実はその差は紙一重と思われる。にもかかわらず，一方が白で一方が黒。実際に社会で生起する“黒い羊”問題においても，白でも黒でもほとんどはっきりした差異は見られない。寸毫の差が白黒の分かれ目となってしまう。これが“黒い羊”問題の本質であり，それ故にここに独特の複雑性が醸し出される。

キーワード：黒い羊，白い羊，表現者，アイドル，女優

【新約聖書ヨハネの黙示録第7章第13節～16節】

^{13節}すると，長老の一人がわたしに問いかけた。この白い衣を着た者たちは，だれか。またどこから来たのか。^{14節}そこで，わたしが「わたしの主よ，それはあなたの方がご存じです」と答えると，長老はまたわたしに言った。「彼らは大きな苦難を通して来た者で，その衣を子羊の血で洗って白くしたのである。

^{15節}それゆえ，彼らは神の玉座の前にいて，

昼も夜もその神殿で神に仕える。玉座におられる方が，この者たちの上に幕屋を張る。

^{16節}彼らは，もはや飢えることも渴くこともなく，

太陽も，どのような暑さも，

彼らを襲うことはない。

……」

はじめに

次々にヒットを飛ばす“多作の天才”秋元康の創造力に刺激を受けて，小論を議論することを思

い立った。彼が楽曲の中で提起する“黒い羊”問題は、実に奥深い。ボブ・ディランは、2016年に、これまでの一連の作詞活動における功績について、ノーベル文学賞を受賞した。このことは、優れた歌詞作品が世の中の高い評価を受けることを示している。歌詞はもはや文学なのである。

本稿では、集団心理学のテーマである“黒い羊”効果を視野におく中で、両極端の座標に位置づけられる2つタイプの“表現者”を範例として分析を進めている。二者をこういう形で取り上げることにについて、異論を抱く向きもあろう。読後のご意見を謹んで頂戴したい。

第1章 “黒い羊”と平手友梨奈⁽¹⁾

【秋元康作詞 “黒い羊”】

信号は青なのかそれとも緑なのかどっちなんだ？
あやふやなものははっきりさせたい
夕暮れ時の商店街の雑踏を通り抜けるのが面倒で
踏切を渡って 遠回りして帰る
放課後の教室は苦手だ
その場にいるだけで分かり合えてるようで
話し合いにならないし
白けてしまった僕は無口になる
言いたいこと言い合って解決しよう
なんて楽天的すぎるよ
誰かがため息ついた
そうそれが本当の声だろう
黒い羊 そうだ僕だけがいなくなればいいんだ
そうすれば 止まっていた針は また動きだすんだろう？
全員が納得するそんな答えなんかあるものか！
反対が僕だけならいっそ無視すればいいんだ
みんなから説得される方が居心地悪くなる
目配せしている仲間には僕は厄介者でしかない
真っ白な群れに悪目立ちしている
自分だけが真っ黒の羊
と言ったって同じ色に染まりたくないんだ
薄暗い部屋の灯りを点けるタイミングって一体いつなんだろう？
スマホには愛のない過去だけが残ってる

人間関係の答え合わせなんか僕にはできないし

そこにいなければよかったと後悔する

人生の大半は思う様にはいかない

納得できないことばかりだし諦めろと諭されてたけど

それならやっぱり納得なんかしないまま

その度に何度も唾を吐いて

嘔みついちゃいけませんか？

NO NO NO NO

全部 僕のせいだ

黒い羊 そうだ 僕だけがいなくなればいいんだ

そうすれば 止まっていた針は また動きだすんだろう？

全員が納得するそんな答えなんかあるものか！

反対が僕だけならいっそ無視すればいいんだ

みんなから説得される方が居心地悪くなる

目配せしている仲間には僕は厄介者でしかない

わかってるよ

La La La

白い羊なんて僕は絶対になりたくないんだ

そうなった瞬間に僕は僕じゃなくなってしまうよ

まわりと違うそのことで誰かに迷惑かけたか？

髪の毛を染めろと言う大人は何が気に入らない？

反逆の象徴になるとでも思っているのか？

自分の色とは違うそれだけで厄介者か？

Oh

自らの真実を捨て白い羊のふりをする者よ

黒い羊を見つけ 指を差して笑うのか？

それなら僕はいつだって

それでも僕はいつだって

ここで悪目立ちしよう

以上は、櫛坂 46 の 8 枚目シングル『黒い羊』の歌詞である。これは、2019 年 2 月にリリースされた。櫛坂 46 は、秋元康を総合プロデューサーに頂く AKB グループの一員で、2015 年に誕生。この新しいシングル曲でも、センターはデビュー以来連続で平手友梨奈が務める。筆者がこのグルー

ブに最初に関心を持ったのは、グループ内ユニットが歌う『ボブディランは返さない』や『チューニング』などの楽曲に出会ってからのことだ。1970年を跨ぐ前後の時代は全世界的に学生運動が最高潮に達しており、ボブ・ディランはその象徴であった。そうした体験の中で少女が二人、ボブ・ディランをタイトルに付した曲を歌う姿は新鮮であり、その母体である樺坂46に興味を抱くのは、筆者にとっては自然の成り行きであった。

樺坂46は、メッセージ性の強い作品を連続して送り出しており、加えて“笑わないアイドル”として知られる存在でもある。この中心が平手友梨奈であり、彼女はその鬼気迫るパフォーマンスから憑依型アイドルとして類型化されてもいる。平手は一昨年来体調を崩し、檜舞台である今年の“NHK 紅白歌合戦”をやむなく欠場するに至った。そのため、今回の8枚目のセンターが平手に任されるか否かが大きな話題となっていた。

また平手は昨年9月に封切られた映画『響』（監督：月川翔）に初主演し、その演技に対して、日本アカデミー賞新人俳優賞が授与された。この映画に出演するかしないか、彼女は熟慮に熟慮を重ね、撮影に入ってから、役作りに関して何度も何度も納得するまで、監督とディスカッションを繰り返したことが伝えられている。スーパーアイドルとはいえ、並みのアイドルとは一味違う大器の片鱗を見せているのだ。

“黒い羊”の歌詞の中で、注目すべき箇所アンダーラインを引いた。それを抜き書きする。

黒い羊 そうだ僕だけがいなくなればいいんだ
目配せしている仲間には僕は厄介者でしかない
真っ白な群れに悪目立ちしている 自分だけが真っ黒の羊
人間関係の答え合わせなんか僕にはできないし
まわりと違うそのことで誰かに迷惑かけたか？
自分の色とは違うそれだけで厄介者か？

十代の多感な少女が歌うのには、昨今のいじめ問題や、深刻な孤独感を想起させ、かなりハードな内容である。秋元康が平手を“黒い羊”に擬したのかどうかは分からない。しかしそれが歌の世界という仮構空間での物語であるにせよ、これを彼女の実像（あるいは虚像）と重ね合わせることによって、さらに共感や感動の輪を広がせたことは間違いない。素人だってカラオケの世界では、いつだって主人公だし、それを聞く人たちも、本人が歌の世界にのめり込めばのめり込むほど、心打たれる部分は大きいはずだ。

『黒い羊』が、聖書をモチーフにしていることは明らかだろう。このMV（ミュージック・ビデオ）の中では、“黒い羊”と目される主人公“僕”（平手）が、“白い羊”たちと距離を縮めようとして、何度も突き放され、大人に引きずり倒され、最後まで孤独に終始する映像が展開されている。ただ

最終シーンでは、“僕”のことを理解する仲間の現れたことが示唆されており、“僕”の絶望にかすかな光の射すことが暗示されてもいる。

センターの平手友梨奈はこの数カ月ですいぶんと変貌を遂げた。たとえば櫛坂46の冠バラエティ番組として、『櫛って書けない』（テレビ東京で毎週月曜の早朝に放送）があるのだが、この中で、平手からは以前の少女らしい屈託のない表情が消え、他のメンバーがはしゃいでいても、一切笑顔を見せなくなった。そればかりでなく休みも多くなっている。彼女に異変が生じていると見ておかしくはないであろう。

そこへこの『黒い羊』のリリース。グループ内の事情に通じているであろう、秋元康が、平手を中心としたメンバーに贈ったメッセージと考えて不思議ではない。なにかずっとここでの問題は、作品中の“僕”を、それを演じる平手にそのまま投影できるか否かということである。

元来“黒い羊”には、のけ者、厄介者、見捨てられた者などのネガティブな意味が込められている。秋元康の作詞にも、厄介者というフレーズが何度か登場する。“白い羊”の対としての“黒い羊”。平手はいまや、弱冠18歳にしてアイドル中のアイドルという存在である。その彼女をネガティブイメージの強い“黒い羊”とする解釈には、一般的に考えて無理がある。彼女はともかく、“白い羊”でなければならない。

“黒い羊”の検証を行う前に、まずは、アイドルとは何者かについて整理しておくこととしよう。アイドルは、知られているように、英語の“idol”を語源としている。和訳では、「偶像」「崇拜される人物」「あこがれの人」「熱狂的なファンを持つ人」「人気者」等々が一般的なところであろうか。この中で、偶像や崇拜される人は、現状のアイドル像と比べるとやや過大な解釈と思われる。小論での理解は、「熱狂的なファンを持つ人」程度に収める。ただ、この意味を採用したとしても、他の芸能人一般との差別化は困難である。このことにおいて、稲増龍夫やカネコシュウヘイ⁽²⁾は、日本の芸能界におけるアイドルを「成長過程をファンと共有し、存在そのものの魅力で活躍する人物」と定義している。

これを意識すると、歌やダンスや芝居は未だそれほどの水準ではないが、ルックス等の“素材”の魅力が圧倒的で、広くシンパシーを得られる人材ということになろうか。したがってアイドルに関して、歌やダンスの上手下手を取り沙汰することなど、端からナンセンスということだ。蛇足ながら、筆者の世代でもっとも典型的なアイドルは浅田美代子であろう。

少し唐突かもしれないが、アイドルは只今現在の技量に不足があるとしても、その成長性にこそ期待するのだとすれば、要するに、彼女らは『風姿花伝⁽³⁾』にいう“時分の花”と言っていいのではないだろうか。“時分の花”とは、年齢が若いというだけで世間にアピールする魅力があるということだ。芸道に励み、押しも押されもしない地位を得るためには、“まことの花”を目指さなければならない。そのためには、血のにじむような努力が求められる。

アイドルは素のままの素材の魅力が優る存在だとして、『花伝』を引くまでもなく、それは年齢

が行けば否応なしに削ぎ落とされてしまう。逆に言えば、“脱”アイドルを遂げなければ、この業界で生き残ることは出来ないということだ。多くのアイドルがグループを卒業して、役者に歌手にタレントへと変身を遂げている。しかしながら、変身を目に見えて成功させた例は少ない。

役者を目指す人たちは“達者”の道を追求しなければならない。歌手を目指す場合には“アーティスト”としての力量が試される。平手がここへ来て、櫛坂46の枠組みに囚われない道を志向しているのだとすれば、未だ十代の少女ではあるが、将来的にもアイドルという存在にとどまるかどうか、ここが正念場と言えるのかもしれない。

素材の魅力に加えて、自分のパフォーマンスに自信を持つアイドルは“脱”アイドルを目指しておかしくない。こうした場合グループ内では、一般的なアイドル像を志向する他のメンバーとのあいだに軋轢も生じよう。平手が一部の仕事を休業していたとき、他のメンバーがセンターとして代役に立った。彼女たちは懸命に与えられた仕事をこなしたが、やはり平手の鬼気迫るパフォーマンスと比較すると、インパクトが少なかったように思われる。このグループには、良くも悪くも8作連続でセンターを務める、平手の垢がこびりついている。

こうしたところに見られるように、これまでの櫛坂46は、平手本人がそれを望む望まないに関係なく、彼女のキャラクターを色濃く映したグループであることに間違いはない。ここで仮説を立てる。櫛坂46のはじまりにおいては、平手を含めてすべてのメンバーは、「可愛ければいい」という、通常のアイドルを目指していたとしよう。

その彼女たちは激烈なオーディションを勝ち抜いて、アイドルの座を射止めた。選ばれた者たちという意味において、同世代の中のエリートであるし、“白い羊”意識が一様に強いと見ていいであろう。平手という強力なセンターの存在が世の中の支持を得、人気の裾野がさらに広がった。この時点では、他のメンバーも平手人気にあやかった方が、自分たちの利益曲線も上方にシフトすると考えておかしくはない。集団に利益をもたらす存在が“白い羊”であるとすれば、平手は“白い羊”中の“白い羊”であった。

ところが時間が経ち、一人の個性が傑出して目立ち始めると、グループ内の足並みが揃わなくなる。櫛坂46にメンバー全員が一致して認識するアイデンティティがあるとして、そのアイデンティティから外れた者は、いくら彼女が、グループに利益をもたらす存在であったとしても、集団内の孤児になってしまう（これは、必ずしも平手でなく他のメンバーであってもいい）。

選抜ではなく全員参加のリレー競走を考えて見よう。クラスの中には、足の速い者も遅い者もいる。当然のこと、足の速い者はクラスに大きな利益をもたらす。したがって高く評価される。一方、足の遅い者はクラス全体の足を引っ張ることになるので、評価されないどころか、最終的に無視・排除の対象になってしまうかもしれない。この例は、成員を能力の優劣で判断しており、良し悪しは別にして、ある意味単純で分かり易い。

しかしながら問題は、何となく気に入らないという不透明な理由で、優れた人物が排除されてし

まう事象である。「あいつ変じゃない？」という無理筋の理屈がまかり通り、排除の論理が働いてしまう。集団の中の多数派が平均的な人物たちだとすれば、能力の優劣でなく、平均値派が多数の論理によって、優秀な人々を排除してしまうわけだ。この場合、理由がクリアではないだけに、排除される当人の当惑はより大きい。

2019年1～3月に放送されたドラマに『3年A組—皆さんは、今から人質です—』（日本テレビ系日曜ドラマ）がある。このドラマの中で、水泳でオリンピックの代表候補となっていた女子高校生が、捏造されたドーピング疑惑に悩み、自ら命を絶ってしまう。彼女は自らの高校に利益をもたらす“白い羊”であったにもかかわらず、指弾の対象となり、結局は悲惨な結末を迎えてしまう。目立ちすぎるから、優秀すぎるからという理由で、ある時点まで称賛を浴びていた者が、一転奈落の底に落とされてしまう。“白い羊”が容易に“黒い羊”に転化してしまうということだ。

第2章 樺坂46の集団性

集団心理学においては、“黒い羊”効果（black sheep effect）が指摘されるという。“白い羊”の集団に一匹だけ“黒い羊”が混ざっていると、“白い羊”は“黒い羊”を仲間とは認めない。羊というくくりにおいては、まったくの同質的存在であっても、その纏う毛皮の色によって差別が生じるということである。仲間集団にありながら、色が黒いというそれだけの特性によって、仲間とは認められずに、見下され排除される。そうした現象が“黒い羊”効果と言われる。

こうした“黒い羊”効果の存在を前提に、集団としての樺坂46について考えてみることにしよう。樺坂46はたかだか20～30人のグループであり、“小集団”として位置づけるのが妥当である。

SI（Social Identity）理論⁽⁴⁾にもとづく集団形成の条件としては、①アイデンティティ、②相互依存性、③社会構造の3つが挙げられている。そして、この3つの条件は規模が大きな社会集団などを対象とするものであり、小集団に当てはまるものではなかった。小集団が社会集団と明らかに差別化されるのは、集団成員間で面識があり、かつ相互作用を持つという一点である（大石・吉田1998 p.164）。

樺坂46は物理的に小さな集団である。上記の繰り返しになるが、“小集団”に関するユニークな構成要因は、集団成員間の認識、相互作用ということであった。樺坂46は小集団であるがゆえに、成員間で相互に認識し、相互作用を働かせていることは明らかであろう。では、社会集団に関する3条件を、小集団に適用することは出来ないであろうか。少々強引かもしれないが、以下では、この3条件を樺坂46に適用することにおいて、チャレンジしてみることにする。

第一に検討するのは、アイデンティティについてである。ここでの樺坂46のアイデンティティを“笑わないアイドル”とする。アイドルはいつもニコニコし、四方八方に愛想がいい存在とすれば、このアイデンティティは十分に差別的であろう。第二は、相互依存性である。アイドルグルー

ブは運命共同体であるとすれば、アイデンティティを墨守するという黙約の中で、一員としての存在を常に確かめ合い、集団の原理に従う行動をとることとなろう。第三は、社会構造である。アイドルという職業が成立するとすれば、それは、ある程度安定的な社会構造を成立させるものであろう。“小集団”ではあるが、一応集団に関する3つの条件はクリアするものと考えたい。

図1を見てみよう。同図は、SC (Self-Categorization) 理論⁽⁵⁾におけるアイデンティティの連続体を示している。要は、われわれのアイデンティティは、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティのミックスチャー（組合せ）で決定されるということだ。右に行けば行くほど、社会的アイデンティティの度合いが強くなり、逆に、左に行けば行くほど、個人的アイデンティティが強まる。欒坂46のアイデンティティ（グループ是）を「笑わないアイドル」とすれば、これが社会的アイデンティティとなる。こうした中で、メンバーの個人的アイデンティティは相対的に薄まり、そればかりか社会的アイデンティティの影響を強く受けるようになる。AKBグループは制服で身を固めていることに見られるように、外見的にも同質性を志向しているものと思われる。そうした環境の中では、鉄の結束とは言わないまでも、全体の方向性に馴染まない向きが、排除の論理に抵触することは十分にありえるだろう。すなわち“黒い羊”効果の発現である。

図2は、SC理論における“黒い羊”効果の説明原理である。同図に従って、この原理について、今少し具体的に説明してみよう。まず第一段階は、「内集団成員性の意識化」と「内集団への同一化」である。このことは欒坂46において、「笑わないアイドル」という成員性（アイデンティティ）を、メンバー各自が意識し、個人的アイデンティティの色合いを薄めつつ、同一化を図るということである。しかしこれでもまだ足りずに、第二段階では、さらに社会的アイデンティティの割合を高めるモメントが働く。この段階では、集団としての外評が未だ定まらないため、集団存続を希求する中で、社会的アイデンティティの要素を一致団結して高める必要が高じるのだ。またそれにつれて、第三段階では、内集団成員（メンバー）に対してさらなる知覚の脱個人化が求められるようになる。ここでは、成員の中から自主的に“風紀番長”のような者が登場して、さらなる結束を促すことにおいて、個人的アイデンティティが抑圧されることともなる。次いで第四段階では、内集団の特徴的次元（アイデンティティ）に関して、その同質性認知がよりいっそう拡大する。結果、集団への帰依と脱個人化が進み、ほぼ集団は一色に染められてしまう。内・外評が一致する揺るぎないイメー

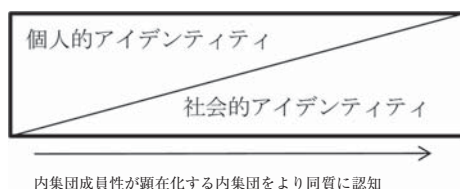


図1 SC理論におけるアイデンティティの連続体
(出所) 大石・吉田「黒い羊効果 (black sheep effect)」

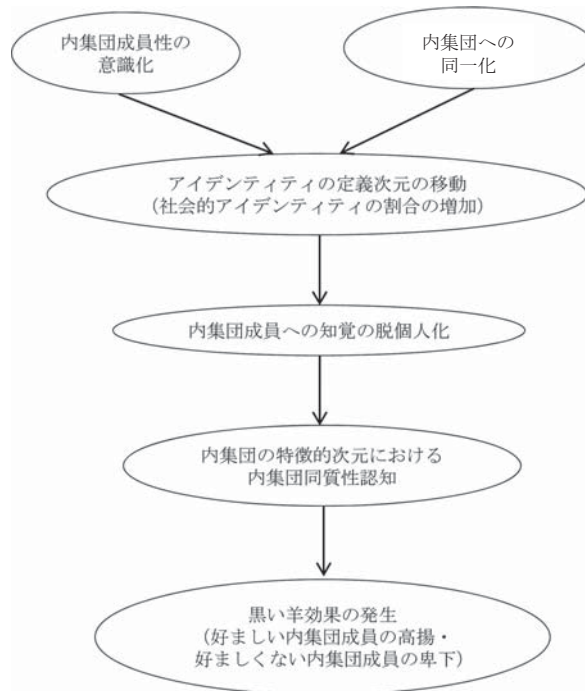


図2 SC理論における黒い羊効果の説明原理

(出所) 大石・吉田「黒い羊効果 (black sheep effect)」

ジに固められた樺坂46の誕生である。

こうしたプロセスを経て、グループ是に反発し“個”を主張し続ける者は、“黒い羊”とされることとなる。言うまでもないことだが、ここにおいて、好ましいと認識される成員はさらに称揚され、好ましくないと認識される成員はその存在すら否定されることともなる。

会社組織を代表とする社会集団の中では、「あいつは変わっている」という評価が命取りとなることが多い。きわめて曖昧な基準で「変わっている」との烙印がいったん押されてしまえば、その評価が定着することにおいて、いつしか組織内の厄介者となってしまう。樺坂46の中で何が起き、秋元康は何を思って、楽曲『黒い羊』を創作したかは想像の域を出ない。

第3章 “表現者” 川上奈々美⁽⁶⁾？

ところで、平手友梨奈は“表現者”と称されることがある。“表現者”というのは、作家、画家、音楽家、役者、パフォーマーなどの創作活動者を指すものと見られる。ただ、これでは少し範囲が広すぎるため、ここではその意味するところを狭ばめて、音楽家・役者・パフォーマーの3つを“表現者”として捉えることとする。内なる思いを、自らの身体を媒体として発信する人たちのことを、

“表現者”として扱うということだ。

他方こうした中で、自ら“表現者”を自称する女優に川上奈々美がいる。彼女が主に活躍するのはAV界である。また、これは事務所がプロデュースしたのであろうが、AVアイドルと言われる存在でもある。普通のアイドルが活躍するフィールドを舞台“Q”とすれば、川上は、それと真反対の舞台“R”を主舞台としている。なお“Q”と“R”の区分はきわめて便宜的かつ直感的なもので、ここでは、彼女たちの主舞台の相違をそう示したにすぎない。

川上を取り上げるのは、平手との“アイドル”あるいは“表現者”繋がりで想起されたからである。ただ、本稿は平手と川上の比較を意図するものではない。樺坂46および平手友梨奈に関する分析は、小集団の中で、少数の者が“黒い羊”化する過程について話題にした。ここでは、「より大きい集団」がその中に包含する「より小さな集団」において、“黒い羊”化している現象について論述することとする。集団としての“黒い羊”化を考察するということだ。

川上がデビューしたのは2012年1月で、現在26歳である。彼女は、標準的なアイドルの水準を超えており、歌やダンスの能力にも優れている。特に、歌は上手い。学生時代にバンドを組んでいたということで、ギターも弾く。実際『未完成ピエロ』というシングル曲も発売している。AKBグループの一員として活躍していても、まったく違和感がない存在である。加えて、舞台女優としての実績もあり、劇場公開される映画にも出演している。こうした多面的な才能を持つことが、AV女優の枠をはみ出して、自らを“表現者”として定義する背景になっているものと考えられる。

舞台出演は2014年に集中しているが、映画は、2015年『メイクルーム』（監督：森川圭）、2016年『下衆の愛』（監督：内田英治）、2017年『獣道』（監督：内田英治）、2018年『女優 川上奈々美』（監督：左近圭太郎）、『プラネット・オブ・アメーバ』（監督：越坂康史）など、毎年コンスタントに出演している。特に、『プラネット・オブ・アメーバ』は、2019年のハンプルク日本映画祭出品作品で彼女の長編初主演作でもある。

また『メイクルーム』は、ゆうばり国際ファンタスティック映画祭における、オフシアター・コンペティション部門のグランプリ受賞作品である。その続編『メイクルーム2』では、川上の持ち歌が主題歌として採用されてもいる。

彼女は、「他の同僚女優がこれまで見せたことのない世界を、“表現者”として切り拓きたい」と言う。ここには、脱AV宣言以上の悲願が込められているのではないのか。そのことは、彼女のフィールドが裏舞台の存在であり、「表舞台のように評価されないので卒業したい」ということとは少し違うようだ。卒業するかしないかは二義的な問題で、むしろこれまでの経験を否定するのではなく、それを糧として飛躍を遂げたい。“表現者”として新たな地平を切り拓きたい。そうした願望こそ真理と、筆者は理解する。

舞台“R”は、R18すなわち18歳未満視聴禁止の世界である。したがって、道徳を重視する向きが眉をひそめることもあろう。AV女優の全数は最大でも10,000人程度(おおむね4,000～6,000人)

ということである。そしてその中で実際に活躍し、この世界で飯を食べることの出来る女優は、100人いるかないかと聞く。要するに数としては圧倒的に少数派であり、加えて、道徳的な観点からの異質性も高い。

以下、樺坂46同様、集団心理学の理論的枠組みを用いて、集団としての舞台“R”について分析してみることにしよう。舞台“Q”でも舞台“R”でも、社会構造的には、両者ともに役者あるいは俳優というジャンルに属する。役者の職業は、平安時代末期には既に存在していたようである。そこから起算すると優に800年以上の歴史があるわけで、言うまでもないことだが、役者はわが国においても、十分に職業として確立している。そうした役者の世界で、映画、ビデオ、舞台等で活躍する女性の演者が“女優”と称される。ゆえに、ここでの彼女たちのアイデンティティを“女優”とすることは自然であろう。また、彼女たちは自分たちのフィールドにおいて、“女優魂”という言葉で代表されるように、信念や価値観を共有している者が多い。集団形成の条件に照らして、女優“集団”は確かに成立しているということだ。

しかし問題は、そうした女優“集団”の中で、舞台“Q”と舞台“R”の差別が生じるということである。ここでは、舞台“R”に属する女優たちは一網打尽的に“黒い羊”にされてしまう。川上に関して言えば、彼女のポテンシャルティは舞台“Q”とは紙一重の差でしかないばかりか、それを凌ぐ場面も多い。にもかかわらず、舞台“R”を主フィールドにしているために、“黒い羊”と認識されてしまう。実際の両者の差異は毛一本ほどにすぎなくても、たいていの舞台“Q”の女優たちが舞台“R”の女優たちに対して、異質感を持っていることは間違いない。ただその根拠はほとんど不明確で、「彼女たちって演技しているの？ やっぱ違うよね」などという漠然とした感じに止まるものと見られる。ここで、川上たち舞台“R”の女優は推定有罪ということになってしまう。

舞台“R”の女優たちの多くが、報酬にプライオリティをおくにしても、基本的に自分自身のリスクで、心身ともにハードな演技に耐えている。邪のバールを剥ぎ取れば、彼女たちはアスリートに近いと言えいいすぎであろうか。『黒い羊』の歌詞、「まわりと違うそのことで誰かに迷惑かけたか？」のフレーズが頭をよぎる。

舞台“Q”の女優と舞台“R”の女優の本質的な差は、達観すれば、「公衆の面前で肌をさらすか否か」あるいは「性」の問題ということになろうか。しかし、これも突き詰めて行けばよく分らなくなる。「阿部定事件」⁽⁷⁾を題材として、1976年に公開された映画『愛のコリーダ』（監督：大島渚）は、その過激なシーンが指弾され、裁判沙汰にもなった。しかしながら阿部定を演じた松田咲子は、そうした役回りにもかかわらず、舞台“R”の女優にジャンル分けはされない。この事象に見られるように、具体的な話になると、“Q”と“R”の明確な線引きは実に難しいということだ。

川上に戻る。彼女は、自らを“黒い羊”として認識しているであろうか。舞台“Q”の女優との差異は勿論意識しているであろうが、それだけのことではないのだろうか。最初から不退転の覚悟

を決めて、舞台“R”の世界に身を投じたのだとすれば、“黒い羊”であることは、端から呑み込んでいるはずである。その証拠に「デビュー以来、自ら“川上奈々美”を演じて来た」と言い切る。この言に従えば、むしろ彼女は、“黒い羊”であることを、あっけらかんと自慢して見せるのかもしれない。確信犯なのである。

必ずしも性にこだわるわけではないが、少し頭を柔らかくして、性をタブー視せず、たとえ異質な出身であっても、その人格を否定しないという姿勢を貫けば、また違った景色も見えて来るのかもしれない。またそのことは必ずや、白い黒いとゴミみたいな違いを後生大事にする旧弊から、われわれを解き放つことに繋がるはずである。

NATIONAL GEOGRAPHIC NEWS 2017によれば、人種の違いは遺伝学的には些末な違いにすぎないと言われる。また Answers IN GENESIS 2008 では、民族間の遺伝子的な相違部分は 0.012% にすぎないとする。現在では耳にすることが少ないが、「日本は単一民族国家」ということが広言される時代があった。しかし、海部 2019 では、「ホモ・サピエンスの集団は何度も枝分かれし、くっついたり離れたりしているので、そもそも“純粋な集団”などどこにもいない」(p.3) と指摘する。肌の色が白でも黒でも黄でも、瞳の色が青でも黒でも茶でも、遺伝子的な相違はほとんどネグリジブルということになろう。要するに、いたずらに相違点を強調するよりは、共通点を取り沙汰した方がはるかに生産的であると言っていいのだ。

おわりに

平手友梨奈は中学生でデビューして以来、一身にグループの重荷を背負って来た。その労苦は計り知れない。しかし彼女のその目線はいつも真摯である。平手とまた違った意味で、川上奈々美も多くの重荷を背負って来た。川上もいつも真剣勝負である。彼女たちは黒でも白でも、与えられた仕事に真っ直ぐに取り組んでいる。そうした姿勢を貫くことにおいては、“黒い羊”を論じること自体ナンセンスであるのかもしれない。

いずれにしても、その二人が期せずして転機を迎えている可能性が大きいとすれば…。

なお SI 理論の構成には、3つの理論的仮定が挙げられると言う。その3番目の仮定が所属集団に満足できない場合の対処法であった。これには、①社会移動、②社会的競争、③社会的創造の3つの方策があるとされる(大石・吉田 1998 p.165)。第一の社会移動は、所属集団に満足が出来ない場合、その集団を替えてしまうとする行動である。第二の社会的競争は、自らの集団のレーゾンドートルを確保するために、果敢に他集団と競う行動である。第三の社会的創造は、自らの生き残りを賭けて、集団を競争力を持つそれにリフォームする行動である(これまでとは異なる次元での他集団との比較可能化)。選択肢はこの3つである。彼女たちが創造する世界は、黒が白であり、白が黒であり、そもそも黒白の区別など存在しないのかもしれない。今後の動向がひととき注目さ

れる。

翻って、渡辺 2014 は、「江戸時代の人びとは幸せに暮らす術を知っていたがために、そこでの暮らしはとても幸せだった」(p.92)と指摘する。また、同じくその中では、エドウィン・アーノルド⁽⁸⁾を引いて、「日本人は、いかにすればお互いに気持ちよく、幸せになれるかについて社会契約を結んでいるように見える」(p.93)。つまりは、「それほど日本人のあいだには互いへの気遣いが浸透していた」とする認識が示される。江戸時代がまったくの理想郷だったと主張するつもりは毛頭ないが、“黒い羊”効果が発現するのは、こうした彼我の社会環境のありようの差が大きいことは間違いない。

今の世の中は、SNSの炎上に代表されるように、ほんのちっぽけなことにぎすぎすしすぎで、お互いにお互いを住みにくくしている。正直なところ、舞台“Q”と舞台“R”の差異がいかほどのものかは分からない。しかし実際は“黒い羊”と“白い羊”の寸毫の差に目くじらを立て、他を排する姿勢がとられることも事実である。こうした時代であるからこそ、江戸時代に学んで互いに寛容な精神を発揮することが大事ではないのだろうか。少なくとも、人と生まれて、気持ちよく幸せに暮らすことは最低の人権であるはずだ。

(2019年6月記)

注

- (1) 平手友梨奈に関する情報は、主としてネット上から確度が高いと思われるものを収集。その上で素稿を5月27日付で本人宛送付し、事実関係について誤認のチェックを依頼した。またその回答期限を6月15日とし、期限までに回答がない場合には「問題なし」ということで投稿の手続きに入ることを通知。結果、期限までに回答がなかったところから、本稿の仕上げを進めることとした。
- (2) 稲増龍夫は、法政大学教授で、専門は社会心理学・メディア文化論。カネコシュウヘイは編集者・ライター・デザイナー
- (3) 世阿弥(1363年?~1443年?)が著した能の理論書
- (4) SI理論では、集団成員性(個人がある集団に属しているという意識)が、個人レベルでは起こり得ない、集団に特有の様々な現象を説明する鍵であるとし、人は所属集団の特徴から自らのアイデンティティの一部を得ていると考える。
- (5) SC理論では、SI理論をベースとして、これに社会的認知研究および自己に関する研究の視点を導入する中で、議論を発展させて来た。
- (6) 川上奈々美についても、基本的な手続きは「注(1)平手友梨奈」の項と同じ
- (7) 1936年5月に、料亭仲居であった阿部定が、愛人男性を扼殺し、かつその局部を切り取った事件。事件の猟奇性から、庶民の関心を強く集めた。
- (8) エドウィン・アーノルド(1832年~1904年)は、イギリス出身の新聞記者(探訪記者)で、日本研究家

文献

秋元康作詞、ナスカ作曲『黒い羊』(CDアルバム樺坂46:黒い羊, Sony Records 2019年2月発売)
大石千歳・吉田富二雄「黒い羊効果(black sheep effect)―社会的アイデンティティへの脅威となる内集団成員への差別現象―」『筑波大学心理学研究』第20号 1998年 pp.163-171

海部陽介「日本人は見事な「混血民族」だ」『選択』2019年4月号 p. 3

渡辺京二「無名の人生」文春新書 2014年8月 pp. 92-93

Answers IN GENESIS (2008.2.20)「人種はなぜあるのでしょうか？」

(<http://answersingenesis.org>) < 2019.6.8 確認 >

NATIONAL GEOGRAPHIC NEWS (2017.10.19)「人種の違いは、遺伝学的には大した差ではない」

(<http://natgeo.nikkeibp.co.jp>) < 2019.6.8 確認 >

“Black sheep” & “White sheep”: The Paradigm on Two Types of Expressive Person

Toshiyuki SAKAI

Abstract

I discussed the “black sheep” problem by analyzing the two types of expressive person, HI-RATE Yurina and KAWAKAMI Nanami, who are diametric opposites. Although they are very different, the differences are in fact defined by a very fine line in my view. However, one is white, and another is black. We cannot uncover if a clear difference in the “black sheep” problem actually occurred. The small differences represent the turning point, which is the essence of the “black sheep” problem. Accordingly a kind of unique complexity is brought about here.

Key words: black sheep, white sheep, expressive person, idol, actress